

## 週刊メッセージ “ユナタン” 6

～ ピアニカ（鍵盤ハーモニカ）のおけいこ ② ～

平成27年11月4日 片山喜章

先週の続き：ピアニカのお稽古をする“愉しさ”と“辛さ”、その両者の溝を埋めるのは何でしょう？「得意な子が他の子どもに教える」子どもが子どもに教えたり教えられたり・・・そんな関係性のなかでピアニカのスキルとは別次元の「こころの物語」が生まれます。その報告です。

\* A園以外、現在、ピアニカの導入を検討中の園や下記の「指導法」を検討している園があります。このメッセージ（実践）は、あくまで“めざす教育のあり方”を示すモデルです。

自分が操作して現れ出た“音色”が“メロディライン”をまとって空間に放たれる快感体験によって、その子は《自分という存在》を強く実感します。しかし、多くの現場では、保育者主導で1音1音、押さえていく一斉型練習方法がヨシ、とされています。そうではなくて、いかに子ども主体に改造するか、そこに創意工夫をはたらかせることが保育者の使命だと思います。

技芸や知識は、獲得自体を目的にするのではなくて、その過程において、友達との関係性を豊かに築きながら結果的に獲得していく。これは「そうあってほしい社会の姿」です。学校教育の授業においても、教授型を脱して、創意を発揮して挑んでいただきたいテーマでもあります。

いざ、《子どもが子どもに教える練習》のスタート（先週の続きです）。

この日、センセイとセイトのバランスは、ほどよい状態でした。子どもたちは、これまでこの「練習方法」でお稽古を何度もくりかえしているのだから、メンバーが固定化されるのでは、と思いきや、そこは気まぐれな幼児の世界。毎回、センセイを変えるセイトの方が多いとのこと。

『あ～、固定のセイトさんをとるのは難しいなあ、どんな教え方をすれば、あの子は、自分のところにずっと居てくれるだろう』と、センセイ（子ども）たちの表情をみていると、そんなふうに思案しているように見えました。『教えてあげる方が悩む？』 気の毒な感じもします、

なかなか覚えてくれないセイト（友達）に対するイラダチ、けれども厳しい教え方をすれば、そのセイト（友達）は他のセンセイ（友達）のところにその場で移ってしまいます。その日、とうとうセイトがゼロになってしまって、センセイが寂しさを味わう場面がありました。

その場に居た私は、その子（センセイ）にどんな言葉をかけてよいのか一瞬、戸惑いました。が、よくよく考えて、その子の様子を気かけながら、けれども見ていないふりをして「何も言葉をかけないかわり」が適切であると判断し実行しました。子どもには“教わりたい欲求”と同量の“教えたい欲求”が基本欲求として存在しているようです。その欲求を叶える場面（授業方法）をこれまで、日本の公教育は用意しなかった。教育改革の1つの視点になると考えます。

自分は“演奏できる”というプライドがあり、しかも、教えてあげるといいう上位の立場にあるのに、セイト（友達）集めに気を遣う奇妙な光景でした。が、価値ある経験だと思います。

一方、センセイ（友達）に教えてもらう“ありがたさ”を感じつつも、なかなか上手にならない“もどかしさ”を味わって、とうとう違うセンセイを替えるセイト（子ども）もいました。

もし、合奏形式で一斉練習をしたなら、その子は不本意ながらがんばるか、がんばっているふりをするか、心ここにあらずで、早く終われと願いながらその時間を過ごしたでしょう。しかしこの場合“なんとか吹けるようになりたい”という意志（焦り）がはたらいて、それがセンセイを替えるという行為に変容したと見て取れたので“けしからん子だ”とは感じませんでした。

X君の話です。ふだん気に入らない事があるとすぐに部屋を飛び出してしまう男児、その日はQちゃんというセンセイ（女児）に1；1で教わり、指を摘ままれて一音ずつ「メリーさんの羊」を奏でていました。その表情は真剣で、持続力が萎えることはありませんでした。一斉指導ではありえない光景です。全体合奏で、X君の指はしっかり動いてマスターしたように見えました。

合奏が終わって見学者から拍手をいただいた後、担任は「ではX君だけ、ひとりで吹いてもらいましょう」とナイスな提案！果たして“どうだろう？”と案じましたが、そんな心配をよそにX君は照れる気持ちを押さえながら上手く吹き切りました。またまた大きな拍手です。

“ありきたりの心温まるドラマ”を見ているような光景でした。が、その時、独奏するX君の姿を眺めていると、私は、別次元の、この業界に対する不満が、ふつつ湧き出てきました。

日本中、至る所で「保育要領」という枠の中に“それっぽい単語”を並べて「指導計画」を作成します。しかし整った「文言」は現場人にとって無意味に近く、その場における「受信力」や「創造性」から生まれた一回生起の「向き合い方」「方法」によって豊かな実践ができることを体感しています。なのに、行政監査では作成文書の良し悪しが評価対象になるのです（怒）！

A園では「お誕生会」に5歳児の得意技をお披露目する時間があります。12月のお誕生児であるX君は再び「メリーさんの羊」を全クラスの子どもたちの前でお披露目しました。追い討ち的有効体験であると思いました。ピアノは合奏練習する前に、まずは“ひとり遊び”で音の不思議を味わったり、少人数での演奏に興じる。それが「自分という存在」を意識し「自分を価値のある存在」として感じる好機になりうると推論しています **“ユナタン” 4** で紹介した“物怖じしないマインドづくり”の点から見ても、しっかり貢献できる取り組みであると思います。

今年2月、こんなユニークなセンセイとセイトの友達関係も「発表会」で「合奏」という共通目標を強く意識しはじめると、一体感、連帯意識へと昇華し変容していきました。 了